様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６３２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２９８３

研究課題名（和文）教室にやる気の「潮流」を作る枠組みの検証と実践―日本人大学生英語学習者を対象に―

研究課題名（英文）Exploring directed motivational currents in Japanese EFL classroom

研究代表者
阿川　敏恵（Agawa, Toshie）

清泉女子大学・付置研究所・教授

研究者番号：９０４０９８０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：Directed Motivational Currents (DMCs)を体験した英語学習者に対する調査を通じて、DMCsの特徴である「明確な目標・ビジョンの存在」、「動機づけを高めるきっかけ」、「学習行動を促す明確な"構造"の存在」、「前向きな感情」を確認することができた。更に、DMCｓで提唱されている事柄に加え、「動機づけを高めるきっかけ」の要因として「つまずきや失敗への反発」があること、やる気の潮流を継続させる要因として「目標の更新」があげられることが示された。
研究期間中にDMCｓ、英語学習者の動機づけに関係する内容での学会を発表16件、学術誌への論文3本の掲載をおこなうことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英語学習者の動機づけは、多くの教育者、研究者が関心を寄せるトピックである。本研究は、英語学習者のやる気の変化の過程を調査し、その変化がどのようにもたらされるのか、また、やる気を継続させることができている学習者にはどのような特徴があるかについて示唆を与えることができた。このことは学術的意義があるだけでなく、教育現場に対する貢献にも結び付くと考える。

研究成果の概要（英文）：　This research project involved interviewing Japanese EFL learners who had experienced Directed Motivational Currents (DMCs). Through the investigation, I was able to confirm the four characteristics of DMCs: specific and significant goals, triggering factors and launch, the structure of the process, and positive emotionality. In addition to what is proposed in the DMC theory, the research project also revealed that "rebounding from stumbles and failures" is a factor that can enhance L2 motivation, and that "updating goals" are factors that may sustain the motivational momentum.
　During the study period, I presented 16 papers at international and domestic conferences and published three articles in academic journals on DMCs and English language learners' motivation.

研究分野：英語学習者の動機づけ

キーワード：外国語教育学　動機づけ　DMCs　複線径路等至性アプローチ（TEA）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

1. 研究開始当初の背景

外国語学習を含むあらゆる学習場面において、学習者のやる気（動機づけ）の重要性は、繰り返し強調されてきている（e.g. Dörnyei, 1994, 2001b; 白井, 2004)。動機づけに関する研究は長年に渡って盛んに行われており（for review, Dörnyei & Ushioda, 2011; 上淵, 2004）、社会心理学的、認知･教育心理学的な視点から動機づけを説明する理論構築とその検証を目指したもの（e.g. Deci & Ryan, 1985, 2002; Gardner, 1985; Gardner & Lambert, 1972）が多くみられた。しかし 1990 年頃からは、実際の第二言語教育現場における学習者の動機づけにも関心が向けられるようになった。この流れを受け、教師が学習者の動機づけを高めるための動機づけ方略や、教育介入にも注目が集まるようになった（Dörnyei, 1994, Dörnyei & Ushioda, 2011）。学習者の動機づけを高める指導に関する実証研究は、示唆に富むものがいくつか発表されており(阿川, 2012; Agawa & Takeuchi, in press; Dei, 2011; 廣森, 2006; Maekawa & Yashima, 2012; Sugita & Takeuchi, 2006; 田中& 廣森, 2007）益々の発展が期待される。

DMC（Dörnyei, et al. 2015; 2016）は、言語学習に対する動機づけ研究の新しい枠組みである。DMC とは、”an intense motivational drive—or surge—which is capable of stimulating and supporting long-term behavior (such as the learning of an L2)（Dörnyei, et al., 2016, p. 2). である。ある活動（ここでは外国語学習）に没頭する状態を取り上げる点でフロー(e.g., Csikszentmihalyi, 1990)と類似した面があるが、DMC は目前の活動に没頭するというよりも、活動の先にある最終的な目標（ゴール）をつねに志向した行動であり、より長期間に渡る取り組みに着目しているところが、フローとは異なる新しい点である。また DMC において学習者は、楽しいことばかりではなく、学習の価値を認めた場合には退屈な学習行動にも取り組む点においても、フローとは異なった。さらに、DMC がこれまでの多くの動機づけ研究と異なる点として、動機と後続の行動をひとまとまりの概念として捉えていることは特筆されるべきであろう。従来の動機づけ研究の大半は、ある一時点における学習者の動機（づけ）を切り取って議論してきたが、DMC の枠組みでは動機と動機づけのプロセスをより包括的に捉えることを目的としている。このような点から、DMC はこれまでの動機づけ研究を一歩進めることができる枠組みとして期待できる。

2. 研究の目的

上記のような背景のもと本研究では、日本人大学生英語学習者の動機づけについて、その生起とその後一定の期間に渡る変化をひとまとまりのものとして調査することによって、英語学習への動機づけプロセスを包括的に示すことと、そこで得られた知見を教育現場へ応用することを目的とした。具体的には、**DMC の 5 つの特徴として示されている、**a)「明確な目標･ビジョンの存在」、b)「動機づけを高めるきっかけ」、 c)「学習行動を促す明確な"構造"の存在」 d)「前向きな感情」、e)**「動機の減退とその結果」のうち、**a)~d)**について、複数の学習者が同時に学習活動に取り組む教室環境において、これらがどのように立ち現れ、機能したかについて、明らかにすることとした。**

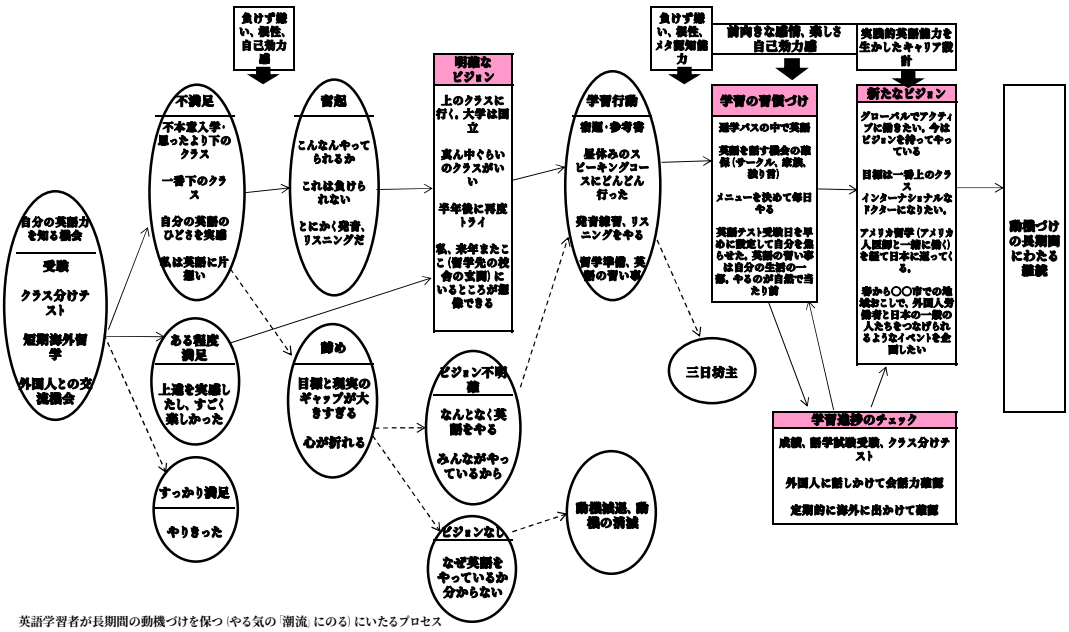
3. 研究の方法

日本人大学生を対象に、過去に DMCs を体験したことのある英語学習者を募り、面接調査をおこなった。参加者の募集時点においては、参加候補者が DMC を実際に体験したかどうかの判断は難しいと予想されたことから、出来る限り多くの候補学生からの聞き取り調査をおこない、それらの中から DMC の枠組みに沿った調査が可能な参加者のデータを採用した。

面接内容は、研究参加者の同意を得た上で録音し、書き起こしをおこなった。書き起こしたデータは複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）(安田･サトウ, 2012)を用いて分析した。

4．研究成果

Directed Motivational Currents (DMCs)を体験した英語学習者に対する調査を通じて、DMCs の特徴である「明確な目標･ビジョンの存在」、「動機づけを高めるきっかけ」、「学習行動を促す明確な"構造"の存在」、「前向きな感情」を確認することができた。さらに、DMCsで提唱されている事柄に加えて、「動機づけを高めるきっかけ」となる要因として「つまずきや失敗への反発」があること、やる気の潮流を継続させる要因として「目標の更新」があげられることが示された。



英語学習者が長期間の動機づけを保つ(やる気の「潮流」にのる)にいたるプロセス

＜引用文献＞

Agawa, T. & Takeuchi, O. (2017). Examining the validation of a newly developed motivation questionnaire. *JACET Journal, 61,*

Csikszentmihalyi, M. (1990). Flow: The psychology of optimal experience. New York, NY: Harper & Row.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior.* New York, NY: Plenum Press.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.). (2002). *Handbook of self-determination research.* Rochester, NY: University of Rochester Press.

Dei, Y. (2011). Pedagogical intervention to enhance EFL students' motivation: An attempt based on self-determination theory. *Journal of Kansai University Graduate School of Foreign Language Education and Research, 10,* 1–19.

Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal, 78,* 273-284.

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom.* Cambridge: Cambridge University Press.

Dörnyei, Z., Ibahim, Z., & Muir, C. (2015). 'Directed motivational current': Regulating complex dynamic systems through motivational surges. In Z. Dörnyei, MacIntyre, P. D., & Henry, A. (eds). *Motivational dynamics in language learning.* Bristol, UK: Multilingual Matters.

Dörnyei, Z, Henry, A., & Muir, C. (2016). *Motivational currents in language learning: Frameworks for focused interventions.* NY: Routledge.

Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow, UK: Longman.Ellis, R. (1994). The study of second language acquisition. Oxford: Oxford University Press.

Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation.* London: Edward Arnold Publishers.

Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House.

廣森友人 (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 東京：多賀出版.

Maekawa, Y., & Yahima, T. (2012). Examining the motivational effect of presentation-based instruction on Japanese engineering students: From the viewpoint of the ideal self and self-determination theory. *Language Education & Technology, 49,* 65–92.

白井恭弘 (2004). 『外国語学習に成功する人、しない人—第二言語習得論への招待—』 東京：岩波書店

Sugita, M., & Takeuchi, O. (2006). Verbal encouragements for motivating EFL learners: A classroom research. *JACET Bulletin, 43,* 59-71.

田中博晃・廣森友人 (2007). 英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践的介入とその効果の検証 *JALT Journal, 29,* 59-80.

上淵寿 (編) (2004). 『動機づけ研究の最前線』 京都：北大路書房

安田裕子・サトウタツヤ (2012). 『TEM でわかる人生の径路 —質的研究の新展開』 誠信書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Agawa T., Yarwood, A., Bennett P., Hashimoto, T., Mynard J., & Shelton-Strong, S.	４．巻 1
２．論文標題 Self-determination theory: Research and practice for language educators	５．発行年 2023年
３．雑誌名 JALT Postconference Publication	６．最初と最後の頁 99-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTPCP2022-12	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 阿川敏恵	４．巻 なし
２．論文標題 英語学習の動機づけと教師による励まし・フィードバックの関係－先行研究に基づいて－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト2020：応用言語学における理論と実践;研究と教育を通して－	６．最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 阿川敏恵	４．巻 13
２．論文標題 英語eラーニングプログラムの運営と成果－学修状況と英語学習動機づけ－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語教育研究	６．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　2件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 阿川敏恵
２．発表標題 英語学習者の動機づけと自律: 自律した学習者の育成を目指して
３．学会等名 JACETリーディング研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 阿川敏恵
２．発表標題 eラーニングへの自律的取り組み要因の探求―面接調査にもとづいて―
３．学会等名 全国英語教育学会 第48回 香川研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Koizumi, Rie, Agawa, Toshie, In'nami, Yo, and Takahashi, Shizuka
２．発表標題 Implementing a learning-oriented digital score report activity: Focus on changes in learning motivation and test perception
３．学会等名 44th Language Testing Research Colloquium（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Agawa, Toshie
２．発表標題 Does a strictly managed e-learning program undermine EFL learners’ internalized motivation?
３．学会等名 PLL(Phycology of Language Learning) Conference 2020（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mynard, Jo, Hashimoto, Tomoko, Shelton-Strong, Scott, Agawa, Toshie, Bennett, Phillip and Yarwood, Amelia
２．発表標題 Self-determination theory: Research and practice for language educators.
３．学会等名 JALT Fukuoka 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 阿川敏恵
２．発表標題 持続可能な外国語学習「ヴィジョン」－日本人大学生への面接調査－
３．学会等名 TEA研究報告会
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿川敏恵
２．発表標題 コロナ禍における大学生の海外への興味喚起 －オンライン英会話プログラムの可能性－
３．学会等名 グローバル人材育成教育学会第７回九州支部大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿川敏恵
２．発表標題 日本人英語学習者の動機づけ（やる気の「潮流」の発生と持続）
３．学会等名 グローバル人材育成教育学会 第８回全国大会・第 1 回国際遠隔会議 JAGCE The 1st International Web Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿川　敏恵
２．発表標題 オンライン英会話レッスンを利用した授業外学修―受講生の取り組み・動機づけ・英語習熟度の変化に注目して―
３．学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 阿川　敏恵
２．発表標題 英語コミュニケーション能力を伸ばすには―効果的な学習のためのヒント―
３．学会等名 しながわ学びの杜 パートナーシップ講座 「可能性を求めて―地球市民としてできること―」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 阿川　敏恵
２．発表標題 英語 e-learning におけるラーニングマネジメントの影響―学習状況と動機づけの変化―
３．学会等名 動機づけ理論研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Agawa, Toshie
２．発表標題 Examination of relatedness needs in Japanese EFL classrooms and task motivation: An interview study
３．学会等名 Psychology in Language Learning（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Agawa, Toshie
２．発表標題 Exploring directed motivational currents in Japanese EFL classroom and task motivation
３．学会等名 Individual differences in second language learning and teaching II: The individual and the context,（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 阿川　敏恵
２．発表標題 やる気の「潮流」から見えてくるもの―日本人英語学習者を対象とした面接調査―
３．学会等名 TEM研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Agawa, Toshie
２．発表標題 Connecting English here in the classroom and out there: Communicative tasks, L2 self activities, and motivation
３．学会等名 The IAFOR International Conference on Language Learning 2018, Hawaii, U.S.A.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 阿川敏恵、萩原綾、葛幸恵
２．発表標題 英語学習者の動機づけを高めるための教育実践―理想自己と義務自己に焦点をあてて―
３．学会等名 全国英語教育学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Toshie AGAWA's HP 阿川敏恵のホームページ https://toshieagawa.hatenablog.com/entry/2019/09/13/123628 リサーチマップ https://researchmap.jp/tagw/presentations

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関